

学会の発展を目指して

柿蔭 眞 (日本菌学会会長)



この度、2007—2008年度の会長をお引き受けすることになりました。学会の円滑な運営と益々の発展のため、微力ではありますが、務めさせていただきたいと思っております。会員の皆様のご支援とご協力をお願い申し上げます。

菌学会は、2006年に創立50年となり、すでに半世紀が過ぎました。創立以来、歴代会長および会員の皆様の菌学に対する情熱と献身的な努力により、学会誌・記念誌などの刊行、また、学術集会、採集・観察会、国際会議、シンポジウムの開催など、精力的な活動が続けられ、これまで発展してまいりました。そのため、現在は、アマチュアから研究者までが参加する日本における菌類に関する総合的な学会として、世界的にも認知され、高い評価を得ています。

しかし、50年を経過した現在、また、新たな変革の時期を迎えています。近年の科学や技術の急速な進歩による学問の細分化、また、情報の迅速化や国際化、さらには、社会の生活スタイルの変化や競争の激化などは、学会の今後のあり方にも大きな影響を及ぼしてきています。そのため、最近の学会の現状は、大変厳しく、財政の逼迫、会員数の減少、英文誌の国際化など、多くの困難な問題を抱えています。

このような課題を乗り越えて行くためには、過去のしがらみに捕らわれずに、創造的なアイデアで、斬新な改革を進めて行く必要があります。また、広報普及活動を積極的に広く展開し、形態的にも生態的にも極めて多様で、地球上で重要な働きをしている菌類のことを、もっと社会に発信し、その生き物としての面白さや人間生活との関わりなどを、多くの人に理解してもらうことも必要であると考えています。それが、今後の学会の発展に大きく繋がるものと思っています。

そのため、様々な問題に迅速に対処し、効率的な運営をして行くため、実務的な理事会を立ち上げました。そして、各担当理事・幹事がそれぞれ責任を持って活動し、学会の発展のための取り組みをして行くことになりました。なお、今期は、以下の項目について重点的に検討したいと考えておりますので、会員の皆様のご指導、ご鞭撻をいただきたく、よろしくお願い申し上げます。

(1) 財政の健全化

学会活動を積極的に推進するためには、財政的な裏付けが必要です。このため、効率的な財源の使用に務めるとともに、外部資金の導入など会費以外の収入源の検討も行う予定です。また、50周年記念事業の募金により、

「菌学振興基金」が設立されましたので、学会の活動や発展に有効に活用させていただきたいと思っています。

(2) 新入会員の獲得

会員数が減少すると、学会活動の維持や活性化が困難となります。そのため、今後、応用分野の研究者やアマチュアの人々に学会の魅力や有益性を理解していただくことが必要と考えています。このことにより、菌学の裾野の拡大が図られるものと期待しています。

(3) 会員サービスの向上

研究会、ワークショップ、観察会などを積極的に開催し、会員相互の交流や親睦を深めるとともに、会員であることのメリットを認めていただけるような取り組みについて検討したいと考えています。

(4) Mycoscienceの質の向上と国際化の推進

学会誌は、学会の研究成果や活動などの情報の発信源として大変重要な役割を担っています。そのため、学会誌の評価は、学会そのものの評価にも大きく繋がりますので、学会誌のさらなる質の向上と充実に向けて努めて行きたいと思っています。

(5) 和文誌とニュースレターの内容の再検討

会員の研究活動報告や情報源としての両者の関係を検討し整理する予定です。

(6) 広報普及活動の促進

ホームページは、学会の情報発信源として重要な位置を占めています。この充実を図るとともに魅力あるものにする予定です。また、最近、学会の社会的な貢献も強く求められていますので、このための対応策も検討したいと考えています。

(7) 国際交流の推進

国際的な交流は、学会の今後の発展にとって不可欠です。アジアの近隣諸国をはじめ、IMA (国際菌学連合) やAMA (アジア菌学連合) とも協力し、国際的な取り組みを積極的に行って行きたいと思えます。また、2007年12月上旬には、マレーシアペナン島で、AMC (アジア菌学会議)、2008年7月下旬には、日中菌学フォーラム (長春) を予定していますので、多くの会員のご参加をお願いいたします。

(8) 若手菌学者の育成

今後の学会を背負って立つ後継者の育成が必要と考えています。

E-mail : kaki@sakura.cc.tsukuba.ac.jp

2007-2008 年度の活動と今後の展望

柿 真 (日本菌学会前会長)

学会を取り巻く状況は、大変厳しく、財政の切迫、会員数の減少、英文誌の国際化など、多くの困難な問題を抱えていました。そのため、このような様々な問題に迅速に対処し、効率的な運営をして行くため、実務的な理事会を立ち上げました。そして、会長・副会長はじめ、各担当理事・幹事がそれぞれ責任を持って活動し、学会の発展のための取り組みをして行くことにしました。具体的な取り組み内容として、(1) 財政の透明化と健全化 (2) 新入会員の獲得、(3) 会員サービスの向上、(4) Mycoscience の質の向上と国際化の推進、(5) 和文誌とニュースレターの内容の再検討、(6) 広報・普及活動の促進 (7) 国際交流の推進、(8) 若手菌学者の育成、を掲げて活動を行ってまいりました。お蔭様で、会員の皆様のご協力と、理事など役員全員の積極的な活動で、この2年間に大きな成果を挙げることができたと思っています。特に、Mycoscience が Web of Science に収録され、2011 年にインパクトファクターが公表されることになったこと、2009 年度の科学研究費補助金 (研究成果公開促進費) (以下科研費) が採択されたこと、さらには、国立科学博物館での「菌類のふしぎ」展などにより、菌類の認識が社会的に高まったことは、今後の学会の発展に繋がるものと確信しています。以下に、具体的な活動内容を述べます。

(1) 財政の透明化と健全化

学会活動を積極的に推進するためには、財政的な裏付けが必要ですが、会員数の減少や、科学研究費補助金 (研究成果公開促進費) が獲得できずに、これまで大変苦しい状況が続いていました。このため、節約と効率的な財源の使用に努めるとともに、財政の透明化を行って、会員の皆様にご理解をいただけるような努力を重ねてきました。幸いなことに、50 周年事業により、「菌学振興基金」ができましたし、また、大会での余剰金や編集関係経費や運営関係経費の大幅な節減などにより、収支の健全化を達成することができました。ただ、現在、財政的な側面から学会活動が制限されていることもあり、活動をより活発化するためには財政的基盤を強化する必要があります。そのためには、今後、広告料などを含めて外部資金の獲得などを目指し、財政の安定化を図る必要があると思っています。

なお、これまでも検討事項となっていた英文誌購読会員費については、科研費申請上の都合もあり、改定させていただきました。また、科研費の申請には、最近、公開入札が求められ、これらの手続きも極めて煩雑になってきていますが、会計担当者に綿密な対応と努力をしていただき、これが科研費の獲得にも繋がったものと思っています。

(2) 新入会員の獲得

ここ数年間会員数の減少が続いています。これは、退会者の増加と新入会員の減少によるものです。会員数を増加させるためには、多くの人に学会の魅力や有益性を理解していただくことが必要と考えて、様々な活動を行いました。観察会や国立科学博物館での「菌類のふしぎ」展などと連携した講習会、講演会、ワークショップ、さらには日本植物病理学会との合同シンポジウムなどを行ってきました。財政上のこともあり、このような活動は不十分でしたが、今後このような努力を地道に続けることが、会員の増加に繋がるものと思っています。とくに、関係する他学会との連携強化は重要と考えています。

(3) 会員サービスの向上

会員であることの有益性の向上は、学会活動の活性化や会員数の増加にも必要です。そのため、財政状況の厳しい中でも、大会、研究会、ワークショップ、観察会などを積極的に開催してきました。幸いなことに、それぞれの担当者の優れた企画と努力により、多くは盛況で、研究の発展とともに会員相互の交流や親睦も深めることができたものと思っています。ただ、今後、観察会など、それぞれの活動の内容をさらに検討し、より有益なものにして行く必要もあると思います。

(4) Mycoscience の質の向上と国際化の推進

学会誌は、学会の研究成果や活動などの情報の発信源として大変重要な役割を担っています。そのため、学会誌の評価は、学会そのものの評価にも大きく繋がります。Mycoscience は、すでに Springer 社から電子ジャーナルとして刊行していましたが、この国際的な評価基準であるインパクトファクター獲得は、学会の長年の懸案事項でした。歴代の編集委員長・編集委員はじめ、多くの会員の皆様のご努力により、この念願が実現し、2009 年度に Web of Science に収録され、2010 年までの論文引用頻度をもとに、2011 年にインパクトファクター値が公表されることになりました。この値はまだ不明ですが、値を高くするためには、定期的に発行し、国際的に評価の高い論文を掲載する必要があります。このため、編集委員長をはじめとして、編集委員会では、質の向上と国際化に向けて様々な取り組みを行ってまいりましたが、国際的な標準で、論文の審査等を迅速に行う「電子投稿審査システム (Editorial Manager)」の導入はその一環です。また、Mycoscience の発行を奇数月にさせていただいたのも、迅速な発行を求められたためです。なお、このような国際的な取り組みが科研費の獲得に大きな効果があったのではないかと考えています。

このように、Mycoscience は、国際的にも認知される学

術誌となりましたが、これを維持し発展させるためには、更なる努力が必要だと思います。国際的に認知されるということは、内容的にも国際的レベルを維持することが必要です。また、今後、Mycological Research や Mycologia と並ぶアジア地域での国際誌として発展していただければと期待しています。

(5) 和文誌とニュースレターの内容の再検討

和文誌とニュースレターも会員の皆様の研究活動報告や情報源として重要です。これまで、和文誌は論文誌として、ニュースレターは情報誌として、それぞれの編集責任者の下で刊行してきましたが、和文誌の論文数が減少したことと、財政的なこともあり、両者の関係を再検討いたしました。その結果、和文の論文の刊行も学会として重要であり、また、情報は、迅速に伝える必要もあるため、しばらく、現在の状況を維持することになりました。しかし、ニュースレターとホームページの内容についての関係の見直しも必要であり、今後の検討をお願いしたいと思っています。

(6) 広報・普及活動の促進

広報・普及活動は、学会にとって極めて重要であり、学会の成果や、菌類のことを、もっと社会に発信し、その生き物としての面白さや人間生活との関わりなどを、多くの人に理解してもらうことが必要であると考えています。それが、今後の学会の発展や会員の増加に大きく繋がるものと思っています。とくに、国立科学博物館で、3ヶ月に渡って開催された「菌類のふしぎ」展は、入場者も多く、多くの人に菌類というものを理解してもらうことができたのではないかと考えています。また、高校生などの若い世代を対象として講習会やワークショップなども開催しました。このような活動の成果は、すぐには現れませんが、将来にとって大きな効果があるものと期待しています。

また、学会ホームページは、学会の情報発信源として重要な位置を占めていますので、今後、益々充実を図るとともに魅力あるものにする必要があると思います。

(7) 国際交流の推進

国際的な交流は、学会の発展にとって不可欠です。そのため、IMA（国際菌学連合）や AMA（アジア菌学連合）とも協力し、国際的な取り組みを積極的に行ってきました。

2007年11月には、マレーシアペナン島で、AMC2007（アジア菌学会議）が開催され多くの会員が参加しました。また、2008年7月には、日中菌学フォーラム（長春）を開催しました。これは、日本菌学会と中国菌物学会の最初の国際会議で、日本と中国の菌学の交流促進を目指して開催したもので、開催にあたっては多くの苦勞がありました。両国の多くの若い世代の参加があり、これを機会に今後の交流が活発になってほしいと願っています。

また、英国菌学会との交流についても、来日した理事等と会合を持ち、台湾での AMC2009（2009年11月）や英国での IMC9（2010年）で合同のシンポジウムを計画することになりました。さらに、2011年に札幌で開催予定の IUMS（国際微生物連合）の国際会議についても、菌学会も参加し計画を進めています。

このように、今後、アジアの近隣諸国をはじめとして、諸外国との国際的な交流活動が、益々活発になってくるものと思います。

(8) 若手菌学者の育成

今後の学会を背負って立つ後継者の育成が必要と考え、講習会などを開催してきました。「菌類のふしぎ」展や、「もやしもん」の影響で、菌類に興味を持つ若い世代が増えてきているように思います。これは、学会にとっては、絶好の機会であると思いますので、若い世代に対する広報・普及活動を積極的に行っていただき、将来の菌類研究者を発掘し育てていただきたいと思います。

最後になりましたが、この2年間、学会の運営にあたり、多くの会員の皆様にご協力とご支援をいただきました。厚く御礼申し上げます。とくに、会長として務められたのは、副会長はじめ、理事・幹事、編集委員等の役員の方々の、献身的なご協力のお蔭であり、心から御礼申し上げます。学会の益々の発展を祈ります。

E-mail: kaki@sakura.cc.tsukuba.ac.jp